

*サラスの七公子 (『イスパニア全史』より)

作者不詳 岡村 一 訳

*第七三六章 ララ郡のルイ・ブラスケスが自分の甥のゴンサロ・ゴンサレスを打擲し、ゴンサロ・ゴンサレスが反撃したこと。ガルシ・フェルナンデス伯が両者を和解させたこと。

ドン・ラミーロ王の治世の二十三年目、すなわち九九七年、受肉の年から数えて九五九年目、オットーの帝国樹立九六二年から二十六年目、この年ルイ・ブラスケスというララ郡生まれのある身分の高い人物が、やはりきわめて高貴な婦人と結婚した。婦人はブルエバの生まれで、ガルシ・フェルナンデス伯の従姉妹にあたり、名をドニャ・ランブラといつた。今名前の出たこのルイ・ブラスケスはビルベストレの領主であつた。彼には妹があつたが、人となりことのほか立派、行状万事申し分ない婦人で、名をドニャ・サンチャといい、サラスの人である善良公ゴンサロ・グステイオスに嫁していた。この夫妻には息子が七人あつて、七公子と呼ばれていた。この七人すべての養育にあつたのはドン・ムニョ・サリードという騎士で、なににおいてもしかるべき振る舞いができると教諭した。やがて七人はガルシ・フェルナンデス伯により同じ日に揃つて騎士に叙任された。

前記のこのルイ・ブラスケスはドニャ・ランブラと結婚するにあたり、ブルゴスの城市で祝宴を催した。その

際ガリシア、レオン、ポルトガル、ブルエバ、エストレマドウラ、ガスコーニュ、アラゴーン、ナバーラなど各地へ使者を送り、誼を結んでいる人々をもれなく招いた。このほかにも多数寄り集まった。この祝宴にはゴンサロ・グステイオスもドニヤ・サンチャと七人の息子、それに七人を養育した傅役のムニョ・グステイオスともなつてやつてきた。祝宴は五週間つづき、的当てや槍投げや闘牛やチエスの勝負やおおぜいの旅芸人などではないそう賑わつた。その間、ガルシ・フェルナンデス伯とルイ・ブラスケスおよび高位の人々は、それぞれはもう多額の金銭を惜しみなく配つたし、立派な贈り物もふんだんに与えた。祝宴終了まで一週間となつたとき、ドン・ロドリゴは命じて河原にとくべつ高い的を作らせ、誰であれそれを割つた者には豪華な賞品を与えると思はされた。木槍をあてる自信のある騎士は残らずそこへつどつたが、どれだけ力を込めて投げてても誰もつべんの的に届かなかつた。

これを見たドニヤ・ランブラの従兄弟のアルバル・サンチエスという騎士が、馬に乗つてその的に木槍を投げにいった。放つた木槍は激しい勢いでつべんの的にあたり、その音は城市じゆうに響いた。それを耳にしたドニヤ・ランブラは、それが従兄弟のアルバル・サンチエスの木槍のあたつた音と知ると、ぱつと顔を輝かせた。そしてうれしくてたまらず、義姉であるドニヤ・サンチャと、彼女とともにいたその七人の息子の前へいつて言つた。

「ねえ、みなさま、ごらんなさいませ、人にすぐれた猛者とはアルバル・サンチエスのこと。だつてあちらに集まつたかたがたのうち、誰もつべんの的にあてられなかつたのでございますよ。できたのはあの人だけ。今あの場で、あの人ひとりとはぬけた力を發揮したのですわ、ほかの誰にもまして」

それを聞いてドニヤ・サンチャと息子たちは苦笑した。しかしそのときは指しはじめたチエスの勝負に熱中していたので、兄弟の誰もドニヤ・ランブラの言葉を気に留めなかつた。ただ末弟のドン・ゴンサロだけは別で、兄たちの目を盗んで馬に乗り、木槍を手にした。一人そちらへ向かつた。同行していたのは鷹を持つ役目の従士だけだつた。ドン・ゴンサロが的の立つている場所へ着いて木槍を投げると、その強烈な一撃は的の真ん中の板を割つた。それを知つたドニヤ・サンチャと息子たちはおおいに喜んだ。けれどドニヤ・ランブラは、いや、まっ

たくおもしろくなかった。ドニヤ・サンチャの息子たちは馬に乗って弟のもとへ向かった。これをめぐってなに
か重大事が起こりはせぬかと危ぶんだのだったが、はたしてその後そうなつてしまった。こういうしだいである。
アルバル・サンチェスはこれでもかとはかりに自慢話をし、それに対してゴンサロ・ゴンサレスは調子を合わせ
ておだててやった。

「じつに見事にお投げになる。ご婦人方はやんやの喝采。わたしの見るところ、その口の端にのぼること、い
やいやほかのどんな騎士もおよばぬ様子です」

それにアルバル・サンチェスは言った。

「ご婦人方が褒めそやしておるとすれば、それは当然の話。なにせわたしが一番。かなう者なしとわかつてお
いでだからな」

それを聞いてかっとなつたゴンサロ・ゴンサレスは、我慢できずに猛然と向かつていき、顔面に拳で強烈な一
撃を浴びせ、齒を折り顎を砕いた。これでアルバル・サンチェスは絶命して落馬した。ドニヤ・ランブラはな
にがあつたか聞かされると、祝宴でこれほど顔に泥を塗られた花嫁はいないと身も世もなく泣き叫んだ。騒ぎを
知つたルイ・ブラスケスは馬に飛び乗り槍を擱んでその場へ向かつた。そして七公子のいる場所へ着くなり槍を
持つ手を振りあげ、思い切りゴンサロ・ゴンサレスの頭を打つた。すると、いたるところから血が流れ出た。手
ひどくやられたゴンサロは彼に言った。

「なにゆえです、叔父上。このようなひどい仕打ちを受ける覚えはありません。兄たちには、ひよつとしてこ
れのせいでわたしが死んでも、叔父上に償いを求めぬようこの場で言っておきます。でも、どうかお願いします。
もう打たないでください、もう二度と。次はおとなしくしておられぬでしょうから」

それを聞いて怒り狂つたルイ・ブラスケスは再度振りかぶつて打つた。だがゴンサロ・ゴンサレスは頭をよけ
たので、槍は肩にあつたのみだつた。力を込めて振り下ろされた槍は二つに折れた。ゴンサロ・ゴンサレスは
このような仕打ちに激怒し、従士が持つてきていた鷹を渡させ拳に止まらせると、猛然と顔にかからせて大怪我

を負わせた。これで頭から鼻から血が流れ出た。ルイ・ブラスケスはこのように手ひどくやられて悲鳴をあげ、「出合え、出合え」と叫んだ。すると配下の騎士がいつせいに集まってきた。

それを見た公子らは供の者たちと離れた場所へ集まった。総勢二百騎だったろうか。さだめてこれはおおごとになると見てとつたのだった。だがガルシ・フェルナンデス伯と公子たちの父親ゴンサロ・グステイオスが、騒ぎを聞いてすぐさま駆けつけ、割つてはいつて双方を分けた。おかげでこのとき事態はそれ以上悪くならなかった。ついでガルシ・フェルナンデス伯は果たすべき役割を果たし、互いに恨みを水に流させた。しかるのちゴンサロ・グステイオスがルイ・ブラスケスに言った。

「ドン・ロドリゴ、そなた、さぞつわものが欲しかろう。そなたの武名は誰より高く、モロ、キリスト教徒、誰もがそなたを羨まんでやまぬ。あつぱれと仰ぎ見られておる。それゆえ、そなたさえよければ息子たちをそなたに任せさせ、そなたを守らせたいと、かねてからそう思つておつた。目をかけてくれて、そなたの力で息子たちがひとかどの者になるようしてもらえるとありがたい。なにせそなたの甥だ。それになにごとも命ずるとおりに動こう、意に添わぬことはすまいでな」

ルイ・ブラスケスは言うとおりにしようと承知した。

第七三七章 七公子がドニャ・ランブラに仕える者を殺したこと。

一件落着し祝宴も終了したので、ガルシ・フェルナンデス伯はブルゴスを去り、伯領の見まわりへ向かった。ルイ・ブラスケスやグステイオ・ゴンサレスはじめ、おおぜいの騎士を引き連れていた。他方ドニャ・ランブラの義姉ドニャ・サンチャ、七公子とその傳役ムニョ・サリードはブルゴスに残り、ドニャ・ランブラおよびその供の一同といたが、やがて皆連れ立つて発つてバルバディリヨへ向かった。公子兄弟は叔母に喜んでもらおうと、アルラソン川沿いを上流へ移動しながら鷹狩を行なつて多くの鳥を得、ドニャ・ランブラのもとへ戻つて進呈した。

そのあと七公子は昼食の支度ができるまで、その庭園にはいつてくつろいで骨休めした。その間ゴンサロ・ゴンサレスは服を脱いでシャツ姿になり、自分の鷹を携えて水浴びさせた。ドニヤ・ランブラは、彼がこのような姿になったのを見て不愉快きわまりなくなり、お付きの侍女らに言った。

「ほら、ごらんなさい、ドン・ゴンサロ・ゴンサレスを。下着姿になどなつて。あれはきつとわたくしたちの気を引くためですよ。そうにちがいないわ。誰がただ（徒）で置くものですか。懲らしめてやる。でない、ほんと、悔しくて夜も寝れない」

こう言うとい人の下僕の男を呼ばせて命じた。

「ゴンブローを一本用意して、中に血をたっぷりお詰めなさい。そしてお庭に公子たちがいるから、そこへいつてゴンサロ・ゴンサレスの胸めがけて投げるのです。手に鷹を止まらせている人が見えるわね？ 投げたら全力で走つてこちらへ戻つていらつしやい。怖がらなくてもいいのよ、ちゃんとわたくしが守りますから。こうやつて、殴り殺された従兄弟のアルバル・サンチェスのかたきを討つてやるわ。あんなふざけた真似をして……この先何人ひどい目に遭わされるかわかりはしない」

そこで下僕はドニヤ・ランブラの言いつけどおりにした。その下僕が自分たちのほうへやつてくるのを見た公子たちは、叔母がなにか食べるものを持つてこさせているのだらうと思つた。昼食が遅れていたからである。叔母とは良好な関係にある、叔母は自分たちに好意を持つており、そこになんの下心もない、彼らははつきりそう思ひ込んでいたのだが、その考えは間違つていた。下僕の男はそばへやつてくるなり、ゴンブローを投げてゴンサロ・ゴンサレスの胸にあて、血だらけにして逃げた。兄たちはそれを見て笑つたものの、腹の底からの笑いではなかつた。ゴンサロ・ゴンサレスが言つた。

「兄上方、大間違いです。なにをお笑いになります。こんな感じで別のものを投げられ、殺されていたかもしれないですよ。それに言つておきますが、わたくしであれば兄上たちの誰かと同じような目に遭わされたら、ただちに相手に思い知らせてやります。兄上方はこのように嘲られ辱められて、それであとあと臍を嚙んだらよいのだ」

するとディアーゴ・ゴンサレスが言った。

「兄弟たちよ、このような場合に処すべきか、皆でよく考えねばな。なるほどこうして顔に泥を塗られたままにしておくわけにはゆかぬ。さもなくばひどい名折れとなる。そこで、ひとつマントの下に剣を隠して、あいつめに近寄ってみようではないか。恐れずじつと待つておるようなら、ただの戯れだつたと思えばよい。だが、もしドニヤ・ランブラのもとへ逃げて庇われるようであれば、かの人の指図であつたと知れる。そのときは、たとえドニヤ・ランブラが庇おうが生かしてはおかぬ」

このディアーゴ・ゴンサレスの言葉を聞いておのおの剣をとり、屋敷のほうへ向かつた。兄弟がやつてくるのを見た下僕はドニヤ・ランブラのもとへ逃げた。ドニヤ・ランブラは彼をマントの中へ入れてやつた。それを見て公子たちが、「叔母上、じゃまをなさらないでください。その男をお庇いにならないでください」と言う、ドニヤ・ランブラは答えた。

「なぜいけないのですか、だつてわたくしに仕える者なのです。あなた方になにか不埒を働いたのであれば償わせましょう。けれどその者がわたくしの配下にある以上、手出しなどせぬほうが身のためかと」

公子たちはドニヤ・ランブラのそばへ歩み寄つて、マントの中にいるその男を力ずくで引きずり出し、彼女の目の前で殺した。あつというまもない出来事で、ドニヤ・ランブラは守つてやれなかつた。むろんほかの誰も。ドニヤ・ランブラは、斬つた際に飛んだ血が頭巾にも衣服にもかかり、血まみれになつた。このあと馬に乗つた公子たちは、母親のドニヤ・サンチャにもそうするよう促し、サラスへ歸つていった。彼らが去つたあとドニヤ・ランブラは中庭の中央に長椅子を置かせ、死者を悼むにふさわしくそれを黒布で覆い、侍女らとともに遺体のそばで三日のあいだ泣いた。大泣きした、それはもうじつに身も世もなく。衣服をむちゃくちゃに破り、自分は夫のいない後家だと泣き叫んだ。——ここでドニヤ・ランブラから離れ、彼女の夫のドン・ロドリゴ、そしてゴンサロ・グステイオスへ話を移すことにしよう。

第七三第八章 アルマンソルがルイ・ブラスケスの要請によりコルドバでゴンサロ・グステイオスを捕らえたこと。

ガルシ・フェルナンデス伯はブルゴスへ帰還。その際ドン・ロドリゴ・ブラスケスとドン・ゴンサロ・グステイオスは伯と別れ、それぞれの妻の待つアラ郡へ向かったが、その道中、騒ぎのあったこと、およびその一部始終について知らされた。知らせを聞いて二人は頭を抱えた。どちらも相手になんと言えよいかわからなかったのである。が、ともかくもバルバデリオまで同道した。それからドン・ゴンサロはドン・ロドリゴと別れ、妻と息子たちのいるサラスへ向かった。ドン・ロドリゴのほうは、屋敷へ戻るとドニヤ・ランブラがそれを見て泣きの涙、ひっかき傷だらけの姿でそばへ駆け寄ってその足もとに身を投げ、どうかお願いいたします、甥たちから受けた恥辱を赦さないでくださいませ、なにとぞなにとぞ報復を、と訴えた。ドン・ロドリゴは答えた。

「ドニヤ・ランブラ、安心しておれ。誓って世に鳴り響くほどの報復をしてやる」

ただちにドン・ロドリゴはゴンサロ・グステイオスのもとへ人を遣り、いろいろと話し合いたいことがあるので明日出てきて会っていただきたいと伝えた。ドン・ゴンサロは七人の息子をともなつてやってきて、バルバデリオとサラスのあいだで会い、ドニヤ・ランブラが七公子に加えられた恥辱について話し合つて和解した。そのあと公子兄弟は叔父のドン・ロドリゴの手に委ねられた。公子たちは叔父に、このたびのことについてはどちらに理があるかご判断願いたい、そして、よいとお思ひのこと、正しいことを行なつていただきたいと言つた。それを聞いてルイ・ブラスケスはおおいに喜んでみせ、それから嘘や口先だけの言葉を並べて甥たちの機嫌をとつて、自分に疑いをいだかぬようしむけた。

それから何日も経たぬうち、ルイ・ブラスケスはふたたびドン・ゴンサロへ使いを出して、またあれこれ話さねばならぬことが出てきたので、先日会つたあの同じ場所へきて会つていただきたいと頼んだ。翌日二人は会い、そのときルイ・ブラスケスはゴンサロ・グステイオスに言った。

「義兄上、よくご承知のとおり婚礼の祝宴はさうとう物入りでした。ところがガルシ・フェルナンデス伯から

は思ったほどご援助いただけなかった、もっと出してくださいでもよかったです。じつはアルマンソルが莫大な額の祝儀を贈ると約束してくれています。ご存じかと。よろしければわたしの書状を持って、あちらへご足労いただけませぬか。そしてわたしの挨拶状を渡し、加えて義兄上の口からもわたしよりの挨拶をお伝えくださればありがたく存じます。そのうえで、このたびの出費がとつもなく嵩み、貴殿からの援助を喉から手が出るほど欲しておる、そうお伝え願えればと。アルマンソルはかならずや承知し、すぐさま相当な額を渡すかと。義兄上がお戻りになったら二人でそれを山分けいたしましたでしょう」

ゴンサロ・グステイオスは、「ドン・ロドリゴ、話はよくわかった。喜んでまいろう」と返答した。ルイ・ブラスケスはそれを聞いてしめしめとほくそ笑んだ。それから屋敷へ戻ると、アラビア語の書けるモロと二人だけになって、次のような書状をしたためさせた。

—— わたくしルイ・ブラスケスよりアルマンソル殿へ。貴殿をとりわけたいせつに思う友と心得、ご挨拶申し上げます。じつは本状を持参したこのサラスのゴンサロ・グステイオスの息子どもが、わたくしならびにわが妻を辱めました。彼らに報復したくはあれど、こちら側、キリスト教徒の地にては難しく、それゆえ父親を貴殿のもとへ赴かせますので、もしもわたくしのことをたいせつにお思いであれば、即刻首を斬ってくださいませよう。さようご処置くださいましたならば、ただちに雲霞のごとき大軍を催し、七人の息子どもを皆引き連れてアルメナルまでまいり宿営いたす所存。そこでお待ち申しますので、貴殿も軍勢を率いて大至急かの地へおいでくださいばかたじけなく存じます。その際、わたくしが厚い誼厚誼を結ぶビアラとガルベをお連れくださいなればと。そうしてわが甥ながら、七人の公子どもの首を刎ねていただきたく。こちら側、キリスト教徒の中には貴殿を憎み害さんとするにおいて、彼らの右に出る者はございませぬゆえ。皆殺しにしたのちはキリスト教徒の地はお心のまま。貴殿のものとなりましょう。と申すのも、甥どもはガルシ・フェルナンデス伯が杖とも柱とも頼む「柱石」者どもでございませぬので——。

こうして書状をしたためて封印したのち、ルイ・ブラスケスは命じてそれを書いたモロの首を斬らせて口封じ

した。それから馬に乗ってゴンサロ・グステイオスの屋敷へ向かい、着くと姉のドニャ・サンチャ相手に虚言を弄した。

「姉上、このたび義兄上にコルドバへご足労いただくことになったのですが、おそらく億万長者になつて戻つてまいられませんぞ。われら揃つてこの先死ぬまで大福長者として暮らせるほどの財を、お持ち帰りになる見込みがあるのです」

それからドン・ゴンサロ・グステイオスにこう言った。

「義兄上、旅立たれるのですから、ドニャ・サンチャにお別れのご挨拶をなさいませ。わたくしもともに発ちます。ビルベストレは途中ですので、そこでご一泊ください」

ということではドン・ゴンサロは妻と息子たち、またその傳役のムニョ・サリードに別れの挨拶をしたのち、馬に乗つてドン・ロドリゴと連れ立ってビルベストレをめざした。その夜二人は水入らずで朝までじつくり語り合ひ、その際ドン・ロドリゴは持つていってもらふ書状を渡した。翌朝ドン・ゴンサロは馬に乗り、ドン・ロドリゴとその妻のドニャ・ランブラに挨拶をして旅路についた。やがてコルドバに着くとアルマンソルを訪ね、書状を渡して言った。

「アルマンソル殿、貴殿の友のルイ・ブラスケスが、貴殿にくれぐれもよろしくと申しております。使ひの趣は、持参したその書状で述べておる願ひにつき、ご返答をいただきたいということ」

そこでアルマンソルは書状を広げて読んだが、ルイ・ブラスケスの姦計を知ると、それを破いて言った。

「ゴンサロ・グステイオスよ、そなたの持参したこの書状はなんだ」

「はて、どういうことでございましょう？」そうゴンサロ・グステイオスが問い返すとアルマンソルは、

「ならば教えてやろう。ルイ・ブラスケスはよこしてまいつたこの書状で、そなたの首を斬れと申しておる。だがわしはそなたに好意を持つておる。そなたはわしにとってまこと好ましい者ゆえそれはすまい。命じて牢に入れさせるにとどめることにする」

アルマンソルはそのとおりに行ない、他方、見張り役を務めるかたわら身のまわりの世話をしたり、入り用なものを与えたりせよと、ひとりの貴族のモロの女をつけた。その結果日ならずして次のようにならざりなつた。ドン・ゴンサロが虜囚の日々を送り、モロの女がその世話をしながら過ごすうち、二人は愛し合うようになつて、やがて子ができたのである。この男児はムダーラ・ゴンサレスと呼ばれた。後年この人物は、ルイ・ブラスケスが父と兄の七公子に対して仕組んだ裏切りの報復を行なつた。物語の先で述べるが、それを恨みとしてルイ・ブラスケスを殺したのである。だが、ここでいったん話頭を転じ、ルイ・ブラスケスとアルマンソルについて語るとしよう。

第七三九章 ルイ・ブラスケスが七公子をともなつて軍勢を率いて進発したこと。

先ほど述べたとおり、ルイ・ブラスケスはゴンサロ・グステイオスをコルドバへ送り出した。そのあと七公子と話したが、その際にこう言つた。

「甥たちよ、これからわしがなにをするつもりでおるか申すと、そなたらの父がアルマンソルのもとへいつて戻るまでのあいだ、アルメナラの野までひと駆けしようと考えておるのだ。ともにまいつてもよいと申すなら、それはもう心強い。だがもしそうでなければ、ここに残つて領地を守つておつてくれてもかまわぬぞ」
公子たちは答えた。

「ドン・ロドリゴ、それは理に適わぬかと。叔父上が遠征なさるのに、われらがご領地に残るなど。それではいかに臆病かをあからさまに示す始末となりましょう。さようなことをすれば、われらはなにかにつけ世間に後ろ指をさされましょう」

「よく言つた」とルイ・ブラスケスはうなずき、このあと、軍勢に加わり自分に従つて遠征し財を得たい者は今すぐ支度整え駆けつけよ、と四方八方に触れさせた。それを聞いて人々は、これぞ朗報と勇躍した。ドン・ロドリゴは略奪行のたび荒稼ぎしていたのである。彼のもとへはわれもわれもと驚くばかりの人数が集まつた。や

がてルイ・ブラスケスは従士を一人遣つて甥たちに、即刻発つてあとを追つてくるよう、エプロスの野で待つてゐるからと伝えた。公子たちはそれを聞くとただちに母親のドニヤ・サンチャに別れの挨拶をし、大至急叔父のあとを追つた。

七人は語らいコトバンクながら進み、途中ある松林へ至つた。そこへはいるとき、このうえもなく不吉な鳥の鳴き声が聞こえた。ムニヨ・サリードはそれに顔を曇らせ、公子たちのほうを向いて言った。

「若様方、どうかサラへお戻りください、母上様のドニヤ・サンチャ様のもとへ。このような徴があらわれた以上、先へ進んではなりません。しばらくのあいだあちらでくつろぎ、なにか飲んだり食べたりなさつておれば、あるいは悪い徴が変わることもあるうかと」

すると末弟のゴンサロ・ゴンサレスが言った。

「ドン・ムニヨ・サリード、それは違うぞ。そなた、よく存じておろう、このたびはわれらで思い立つてゆくのではない。あくまで軍勢を集めた方のご意向だ。徴は叔父上に引き寄せて解すべきもの。なにせわれらはじめ皆を率いておいでなのだから。だがそなたはもはや歳も歳ゆえ、そうしなければサラスへ引き返してもよからぬぞ。われらはこのままルイ・ブラスケス叔父に従つてまいるつもりだ」

それに対してドン・ムニヨ・サリードは、

「いや、ほんとうに真剣に申すのです。このまま先へお進みになるのは納得しかねます。不吉な徴が見えております。二度とお屋敷へは戻れなくなりませう。もしもこの徴を打ち消したいと思し召すなら、母上様へ使いを遣つて、七つの長椅子を布で覆い、それを中庭の中央に置いて、若様方が亡くなつたかのごとお泣きくださるようお頼みなさいませ」

するとふたたびゴンサロ・ゴンサレスが言った。

「ドン・ムニヨ・サリード、申すことがいぢいち癩に障るぞ。誰か自分を殺せる者があれば、そうしてくれと頼んでおるようなものだ。よいか、そなたはわたしの傳役だが、もしそうでなければその口ゆえこの手にかける

ところだ。言っておく、固く申しておくが、さようなことはこの先二度と口にするな。そなたになにを言われようが、われら引き返しはせぬ」

ムニヨ・サリードはこの言葉に深く心を痛め、公子たちに言った。

「よかれと思つて申そうが、なにを申そうが、聞く耳持つていただけぬとは、わたくしは星のめぐり悪しきとき若様方をご養育申したのでございますな。ならばお願い申します、わたくしは戻りますので別れのお言葉をくださいませ。もうこの先二度と若様方とお会いすることはないと、よく存じておりますゆえ」

公子たちはこの言葉を真剣にとらず、別れを告げて先へ進んだ。一方、ドン・ムニヨ・サリードは馬首を返してサラスへ向かったが、途中で、手塩にかけてきたあの若者たちを命惜しきに見捨ててきたのは誤りだった、なにより自分は寄る年波に老いた身ではないか、と思ひ返した。どう考えてもああすべきではなかった、なぜならまだ若い彼らは生きねばならぬ、自分のような者こそどこであれ死地へ赴くのがほんとうだ、と。兄弟が死を恐れぬ、それをなんとも思つておらぬとすれば、彼はもつとずつとそうあらねばならぬはずであった。さらに、もし公子たちが討ち死にし、ルイ・ブラスケスが無事帰還するとしたら、傳役の務めを果たさなかつたことになり、そうなるとルイ・ブラスケスに殺されたところでおかしくあるまい。このような振る舞いをすればなにかにつけ世の悪評の種となろう。それに、兄弟があちらで命を落とすとすれば、それはきさまのせい、きさまがおかしなことを吹き込んだせいと、白い目で見られもしよう。「せつかく若いとき名を得ても、晩節を穢すのはわが身には耐えがたい屈辱」とムニヨ・サリードは呟いた。そう思ひ至ると、馬首を返して公子たちを追つた。さて、彼にはこのまま進んでおいてもらい、今度は七公子へ話を移すとしよう。

第七四〇章 ルイ・ブラスケスがムニヨ・サリードを脅し、両陣営の殺し合いになりかけたこと。

七公子は傳役と別れたあと、先へ先へと進んでエプロスに着いた。ドン・ロドリゴは七人の姿が目にはいると、

迎えに出て、もう三日も前から待つていたぞと言つたあと、傳役のムニョ・サリードはどうした、なにゆえ同道しておらぬと尋ねた。そこで兄弟は徴をめぐつて彼とどういうやりとりがあり、それでどうなつたか、事情を詳しく説明した。それを聞いてルイ・ブラスケスは兄弟を油断させようと言つた。

「いやいや、それはとりわけめでたい徴ではないか。われらはなにひとつ失わず、山のように分捕れると告げておるのだ。ドン・ムニョ・サリードめ、そなたらとまいらぬとはなんたる不届き。あとでしまつたと地団太踏んでも知らぬぞ。やり直したくともあとの祭りになればよい気味だ」

彼らがこうして話しているところへムニョ・サリードがやつてきた。公子たちはその姿を見て、よくきれくれたと大喜びした。ところがこのときルイ・ブラスケスは、

「ドン・ムニョ・サリード、そなたはなにかにつけいつもわしのじゃまばかり。今度もまたじゃま立てするか。思い知らせてやらねば腹が立つて夜も眠れぬわ」となじつた。

こう言われてドン・ムニョ・サリードは言葉を返した。

「ドン・ロドリゴ、わたくしはなにも悪しかれと思つておるのではなく、まことを申しておるだけ。われらにあらわれた徴が吉相と申してご兄弟の気を引こうとする者があれば、相手が誰であれ、裏切り者め、偽りを申すな、それはまことではない、さては畏をしかけたな、畏にはめようとしておるなど、さよう面罵する所存でございます」

ムニョ・サリードがこう言つたのは、ルイ・ブラスケスがなにを吹き込んだか承知していたためだつた。あてこすられたと気づいたドン・ロドリゴは、侮られた、面目を潰されたと激怒し、声を張りあげて言つた。

「おい、家臣ども！ わしはそなたらに無駄飯を食わせておるのか。わしがドン・ムニョ・サリードからこうして辱めを受けたのを目にしながら、黙つて見ておるのか。いや、それどころかまるでよそごとではないか」

こう言われてゴンサロ・サンチェスという騎士が、押つ取り刀でドン・ムニョ・サリードへ向かつていった。しかしそれを見たゴンサロ・ゴンサレスが駆け寄り、その男の顎と肩のあいだを強烈に拳で一撃すると、絶命してルイ・ブラスケスの足もとへ倒れた。これに烈火のごとく怒つたルイ・ブラスケスは叫び声をあげ、そしてな

んとか甥どもに報復してやろうと、皆の者、出合えと命じた。公子らとムニヨ・サリードはそれを見て、叔父が自分らと命のやりとりをしようとしてしていると悟り、引き連れてきた二百人のつわものとともに別の場所へ移動した。それから双方隊形を整えたが、そのようになつたときゴンサロ・ゴンサレスがルイ・ブラスケス叔父に言った。「これはなんとしたことですか？ モロを襲撃にゆくゆえ領地を出て当地へまいれとおおせになつておきながら、今こうしてわれら相手に命のやりとりをなさろうと？ まったくもつて納得しかねます。ひよつとしてその御仁を殺したことに腹立ちであれば、しかるべき賠償を行なう用意があります。決まりの額は五百スエルド。それをお渡ししましょう。これでことを収めていただくようお願い申します」

ドン・ロドリゴは、目論見どおり望みを果たすのはまだ時期尚早と判断した。また、ここで兄弟に去られてはこの地からは生きて戻れまいと危ぶみもして、申したことはおおいに納得がいった、それでよいと返答した。

第七四一章 モロ軍とキリスト教軍が戦い、その際ムニヨ・サリードとつわもの二百騎、加えて公子の一人フェルナン・ゴンサレスが討ち死にしたこと。

こうした騒ぎがあつてそれが無事着したのち、一行は天幕を畳んで道をつづけた。その日はかなりの道のりを進んで、翌日の朝まだきアルメナルの野へ至つた。ドン・ロドリゴは引き連れてきた者たちと、外から見えぬ場所に身を潜めた。それから甥たちに、一帯を駆けまわつて手当たりしだいに奪え、分捕れ、しかるのち自分のもとへ戻つてこいと命じた。というのもあらかじめモロ側へ使いを送り、家畜を外へ出して草を食ませておくよう、人も出て思い思いの場所へ散つておくよう伝えていたのだつた。そこで公子たちはルイ・ブラスケス叔父の指示に従うべく馬に乗つた。しかし傳役のムニヨ・サリードが諫めた。

「お待ちください。分捕ろうと逸りすぎてはなりません。どうせたいしたもののは得られますまい。少しお待ちになれば、今おいでになるよりずっと多くを奪えましょう」

こうしているうち軍旗や槍旗を掲げた一万余の大軍があらわれた。それが見えたときゴンサロ・ゴンサレスがルイ・ブラステスに、「あれに見える軍旗はなんでございますか？」と問うと、答えて言うには――

「いやなに心配にはおよばぬ。あれがいかなるものか教えてやろう。これまでこのあたりを三度ばかり駆けまわり、それで数えきれぬほど分捕ったが、立ち足はだかるモロもなにも、それこそ一人もおらんのだ。そのうちに、知らせを聞いたあのようなむさくるしいモロどもがまいて、今あれに見えるごとく槍旗やら軍旗やらを掲げて彼方にたむろし、威圧するだけはしておったがな。果敢に野を駆けよ。なにも恐れることはない。もしものときは加勢してやるゆえ」

こう言っておいて、ルイ・ブラステスは兄弟の目を盗んでモロ軍へ向かった。それに気づいたムニョ・サリードは、モロどもになにを言うつもりか聴こうとあとをつけた。ルイ・ブラステスは着くとピアーラとガルベに言った。

「友よ、今こそ甥の七公子にわが恨みを晴らしてもらおうよい機会。なにせここへ連れてきておるのはたった二百人ばかり。とり囲んで袋の鼠とし、一人も生きて逃がさぬようにしてくれ、わしはけつして助けぬゆえ」

これを聞いてドン・ムニョ・サリードは怒声を発した。

「この裏切り者、悪党、よくもわが甥を畏にはめたな！ 天罰を受けるがよい！ そなたのこの裏切り、世の末まで語り継がれようぞ」

こう言い捨てるに公子たちのもとへ駆け、声を張りあげこう告げた。

「若様方、いくさ支度を！ 叔父御のルイ・ブラステス様はモロどもの仲間。腹を合わせ英和・和英でそなた様らを討つおつもりでございますぞ」

これを聞くや全員大急ぎでいくさ支度して馬に乗った。数において遙かにまさるモロ勢は、それを見て十五段構え十三段構えの陣形を作ると、兄弟へ向かつて押し寄せとり囲んだ。それを前に傳役のムニョ・サリードは兄弟を励まして言った。

「若様方、奮い立たれよ！ 怯んではなりません。凶兆と申した徴はじつはさにあらず。むしろ大々吉。われ

ら勝利し、敵より財を得ると告げておつたのでございます。いざ、わたくしが先陣にて戦いましょう。これよりは若様方のご加護を天にお頼み申さん」

言いおえるなり馬に拍車をあて、猛然とモロ口軍に突進して次々と討ちとつた。だが殺到するモロ口兵に激しく攻め立てられ、ついに落命。その後、乱戦となった。双方勇躍して敵にかかり、討ち取らんと意気に燃えて戦つた。いくさ場はまたたくまに死体で埋まつた。このうえなく激しい大いくさ。史伝によればキリスト教勢は勇猛果敢に戦い、あらがうモロ口軍の第二段まで突破、三段目へ至つた。両軍とも多くの者が斃れた。この時点でモロ口勢は千人以上を失つた。だがキリスト教徒側もまた二百人を討ちとられ、七公子を残すのみとなつてしまつていた。兄弟は、勝利か、さもなくば死かという状況に立ち至つたのを悟ると、神に一身を託し、使徒聖ヤコブを呼び求めながら、敵勢へ突つ込んでいった。そして猛然と敵にかかつて果敢に戦い、討つて討つて討ちまくつた。ためにモロ口は震えあがり、兄弟の前に立とうという者は誰もいなくなつた。しかしさすがの兄弟もこれほどの大軍を前にして、どう切り抜ければよいのかと困り果ててしまつた。そこでフェルナン・ゴンサレスが兄弟に言つた。

「弟たちよ、われら、全力を傾けねば。勇気を振り絞つて戦わねばならぬ。今となつては神のほか頼るべきものはないのだ。ここに至つて傳役のムニョ・サリードも、連れてきた味方もことごとく討ちとられてしまつた。さればもはや皆のかたきを討つか、あとを追つて死ぬほか道はない。あるいは戦いに疲れるようなことがあるかもしれないが、そのときはあれにあるあの丘へ登つて息を入れよう」

弟たちはこの言葉に応じ、猛然とかかつていった。なんとかかたきを討ちたいという気持ちがありあり見てとれた。そして死人の山を築いていったが、しかしその間長男のフェルナン・ゴンサレスが、殺到する敵の手にかかつて命を落とす事態となつた。やがて戦いに疲れた残りの兄弟は、激戦の中から抜け出して先ほど話に出てきた丘へ登つた。そして汗とほこりにまみれた顔をぬぐつたあと、長男を探した。が、みつからなかつた。兄弟は兄の死を確信し、胸が張り裂けんばかりになつた。

第七四二章 七公子と彼らの加勢に駆けつけた三百騎が全滅したこと。

丘へ登ったあと、兄弟はピアラとガルベに使者を送って休戦を申し入れようと決めた。その間に叔父のルイ・ブラスケスに状況を伝え、救援に駆けつける用意があるかどうか尋ねてみようとしたのだった。彼らはこれを実行に移した。ディアーゴ・ゴンサレスがルイ・ブラスケスのもとへ行ってこう伝えたのである。

「ドン・ロドリゴ、なにとぞご賢慮ください、ご加勢を。われらはモロどもに攻め立てられて瀕死のありさま。すでに叔父上の甥フェルナン・ゴンサレスとムニヨ・サリード、それに連れてまいった二百騎を討ちとられてしまいました」

するとドン・ロドリゴは答えた。

「そうか、武運を祈っておるぞ。——そなたらはブルゴスでアルバル・サンチェスを殺し、わしの顔に泥を塗った。なにゆえそれを忘れたなどと思う？ それから妻のドニャ・ランブラにした狼藉、目の前で下僕を殺したではないか。エプロスでもあの者を殺したな。そなたらは豪傑揃い。せいぜい互いに助け合ってなんとかすればよからう。わしの加勢などあてにせぬがよい」

ディアーゴ・ゴンサレスは返答を聞くと、叔父のもとを去って兄弟の待つところへ帰り、なんと言われたかありのままに伝えた。このように彼らが孤立無援で窮地に陥っていた一方、ルイ・ブラスケスが引き連れていたキリスト教徒の中に、兄弟の救援に駆けつけねばという気持ちを押から心に吹き入れられた者たちがあつた。これでおよそ千騎がルイ・ブラスケスの一団から離れた。しかし彼らが加勢に向かっている途中、ルイ・ブラスケスにその知らせがいった。ルイ・ブラスケスは彼らの後を追ひ、引き返させようと言った。

「かたがた、甥どもにはおかまいあるな。武勇を披露させておけばよい。いざとなればわたくしが助太刀いたしますゆえ」

言われてつわものたちは引き返したものの、後ろ髪を引かれる思いであつた。そこに腹黒い考えのあるのを

はつきり見抜いていたからである。しかし幕舎へ戻ったあと、ドン・ロドリゴの目を盗んで三人、四人とそこを出て、都合三百人ほどがひとところ集まり、生死をかけて七公子の助勢にゆかぬ者は裏切り者となるであろうと誓い合った。また、ひよつとしてルイ・ブラステスが連れ戻そうとしたらば、うむをいわさずその場で命を奪ってしまおうとも。これだけのことを申し合わせたあと、馬に乗って駆けに駆けた。彼らがやってくるのが見えたとき、公子らは叔父が自分たちを殺しに襲ってきたのかとはつとした。一団は近くまでやってくると声を張りあげて言った。

「公子方、ご懸念におよばず。加勢にまいったのです。このたびわれら貴殿らと生死をともしようと覚悟を決めました。叔父御が貴殿らをなにごんでも殺そうとしておる、しかとそう悟りましたゆえ。まんいちこの場を生きて逃れられましたなら、われらを叔父御から守るとお約束ください」

兄弟はそうすると約束した。こう言葉を交わしたあと、すぐさま一丸となってモロ軍へかかっていき、寡兵ながらも前代未聞の激烈さ、猛烈さで攻め立てはじめ、一騎も損ぜぬままモロ兵の屍の山を築いた。史伝によれば二千人以上を討ち取ったとか。だが繰り返し戦ううち、最後には公子たちの助勢にきた三百騎はことごとく討たれてしまった。公子たちもまた戦い疲れ、腕をあげて敵に剣を振るうことすらままならなくなっていた。ピアラとガルベは兄弟が疲労困憊、孤立無援になったのを見て心を痛め、寄っていつて乱軍の中から連れ出した。そして自分たちの幕舎へともない、鎧兜を脱がせたのち、命じて彼らに酒食を与えさせた。それを知ったルイ・ブラステスはピアラとガルベを訪ね、このような者どもを生かしておくのは大罪、代償を払うはめになるぞと脅した。また、このまま兄弟を逃しでもすれば、もはや自分はカステイリヤへは戻るまい、ここからコルドバへ赴いてアルマンソルに訴え、その罪でそなたらを成敗させるとも。それを聞いて二人のモロは震えあがった。ゴンサロ・ゴンサレスが叔父を面罵した。

「おのれ、まことなき裏切り者め！ 信仰の敵を叩くとわれらを軍勢に加えて連れ出してにおいて、今その敵にわれらを殺せと言うのか。われらへこのような裏切り、天罰を受けるがよい！」

ピアーラとガルベが兄弟に言った。

「困りました。叔父御のルイ・ブラステス殿がお言葉どおりコルドバへおいでになれば、あちらでただちにイスラム教へ改宗なさいます。そうなればアルマンソル様は叔父御に万事をお任せになり、われら、お助けしたせいでどのような目に遭うかわかりませぬ。ならば貴殿らをもとのいくさ場へお戻りするほかなし。われらにとつてはいたしかたなきこと。よくおわかりいただけるかと思存しますが」

二人はそのとおりにした。モロ軍は公子たちがいくさ場へ戻つたのを見届けると、太鼓を打ち鳴らし、降る雨のごとく密集して攻めかかった。古今に絶する大激戦が開始された。史伝によれば、兄弟はわずかなあいだに二千と六十人を討ちとつたとか。六人はいずれも一騎当千、まこと勇猛果敢に戦つたが、なかでも末弟のゴンサロ・ゴンサレスは拔群、誰にもましてみごとな戦いぶりだった。けれどモロ軍は雲霞のごとく、しよせん多勢に無勢。兄弟はいくさに疲れ果て、その場からただの一步も動けなくなつてしまった。馬もまた同じ。皆戦意こそ失つていなかつたものの、すでに手には剣もなにもなかつた。どれも折れたり失つたりしていたのだつた。モロ勢は兄弟が丸腰になつたのを見るや、馬を殺して彼らを捕らえ、甲冑を脱がせた。そうして叔父のルイ・ブラステスの見ている前でただちに、次男三男……という具合にひとりずつ首を斬つていった。末弟のゴンサロ・ゴンサレスは、兄たちが目の前で斬首されるのを黙つて見ていられなくなり、首斬り役のモロへ突進して拳で喉に強烈な一撃を見舞い、絶命させて地面へ倒した。そしてその男の持つていた剣をさつと拾うと、それを振るつて周りにいたモロを斬りまくつた。その数二十人余りと史伝は語る。しかしやがて捕らえられ、その場で首を刎ねられた。前に述べたとおり、こうして七公子はことごとく殺されてしまった。このあとルイ・ブラステスはモロたちに別れを告げ、領地のビルベストレへ帰つていった。他方モロたちは兄弟とムニョ・サリードの首を拾い集め、それを携えてコルドバへ向かつた。

第七四三章 ゴンサロ・グステイオスが捕らわれの身から解放されてサラスへ帰ったこと。

コルドバに着いたピアラとガルベはアルマンソルの前へ参上し、七公子と傳役のムニヨ・サリードの首を差し出した。それを見て誰か見分けたアルマンソルは、こうして皆殺しにされてしまったことに少なからず心痛む様子を見せた。そうして血で汚れた首を葡萄酒で洗わせ、それが済むと広間の中央に白い敷布を広げて兄弟全員の子を長男次男……という順に並べるよう命じ、最後にムニヨ・サリードの首を置かせた。それを終えたのち公子らの父親ゴンサロ・グステイオスの閉じ込められている牢を訪れ、「ゴンサロ・グステイオスよ、変わりはないか？」と尋ねた。すると彼は答えて言った。

「はい、おかげさまで。ここへきてくださったとは、このうえない喜びでございます。これはきつとこれからなにかしてくださるおつもり。ここから出していただけなのかと。なにせ会いにきてくださいました。殿様たるお方が捕らわれ人をお訪ねになったあと、お解き放ちになるのはしきたりでございますので」

するとアルマンソルはゴンサロ・グステイオスに言った。

「じつは先ごろカステイーリヤの地へ軍勢を出したのだが、それがそのアルメナルの野でキリスト教徒と一戦して勝ち、今、ごく高い身分の者の首八つを持ち帰ってまいった。うち七つは若武者の首、残るひとつは老武者の首だ。そなたを牢から出すゆえ首実検してくれぬか。家臣の將軍どもがララ郡の地生えの者と申しておるのでな」

ゴンサロ・グステイオスは答えた。

「お見せくだされば誰だかお教えいたしました。またどこの者かも。なにせカステイーリヤじゅうのひとかどの騎士で、見知らぬ者はございませぬゆえ」

そこでアルマンソルは彼を牢の外へ出すよう命じた。——首を見てそれが誰か知ったゴンサロ・グステイオスは、衝撃のあまり気を失って床へ倒れた。しばらくしてわれに返ると身も世もなく泣き叫びはじめたが、やがてアルマンソルに言った。

「これが誰の首かよく存じております。七つはわが息子たち、サラスの七公子。この残るひとつは息子らを養育したその傳役ドン・ムニヨ・サリード」

言いおえると、並んだ首の前でまた手放してコロケーション「手放し」嘆き悲しみだした。それはもう、見れば誰もが袖を濡らさずにいらなくなるような光景だった。やがて首をかわるがわる持つて、ひとりひとりの立てた手柄を数えあげた。そのあげく激情にかられ、広間にあつた剣を攫むと、それを振るつてアルマンソルの前で高官を七人斬り殺した。モロたちは彼をとり押さえ、それ以上暴れるのをやめさせた。ゴンサロ・グステイオスはアルマンソルに自分を殺してくれと頼んだ、こうなつたらもう生きていてもしかたがない、死んだほうがましだからと。しかし同情していたアルマンソルは、誰も彼に手出しせぬよう命じた。こうしてゴンサロ・グステイオスが悲しみのあまり身も世もなく嘆き、滂沱の涙を流しているさなか、モロの女が近寄つてきて声をかけた。身のまわりの世話をする役につけられたと前に述べた、あの女である。

「しつかりなさいませ、ドン・ゴンサロ様。泣くのはおやめくださいませ。悲しみを振り払ってくださいませ。わたくしにも息子が十二人ございました。いずれも凜々しいつわもの。そうしてやはり、この身の因果、ある日いくさで枕を並べて討ち死にいたしました。けれど、だからといってわたくしは氣力を失わず、心を奮い立たせました。女のわたくしがなんのこれしきと奮い立ったのであれば、つわものたるそなた様はなおさらそうあらねばならぬはず。ご子息の死をいくらお泣きになつても、それで取り戻せるわけではございません。果てに嘆き死になさつたところで、なんの得がございましょう」

するとアルマンソルが言った。

「ゴンサロ・グステイオスよ、そなたはたいへんな目にあつた。だいじなものを失つた。深く同情しておる。それゆえ、そなたを閉じ込めておる牢から出してやろうと思う。そして入り用なものを与え、加えて息子たちの首も渡すゆえ、妻のドニヤ・サンチャの待つ領地へ帰るがよい。もう久しくそなたの顔を見ておらぬゆえな」

ゴンサロ・グステイオスは答えた。

「アルマンソル殿、いただいたありがたいお言葉、神の嘉したまわんことを。いつの日かこのご恩をお返ししたいものでございます」

ドン・ゴンサロの世話をしているかのモロの女は、このあと彼を離れた場所へ連れて行って言った。

「ドン・ゴンサロ、わたくしはそなた様のお子を宿しています。どういたすのがよいか、お考えをお聞かせくださいませ」

彼は言った。

「もしもそれが男なら、乳母を二人つけて心を込めてたいせつに育て、やがて分別のつく歳になったら、わが子であることを明かしてサラスへよこしてくれ」

このあとゴンサロ・グステイオスは、指にはめていた金の指輪を抜いて二つに割り、片方を渡して言った。

「この指輪の半分を形見として持つておけ。幼子が大きくなってわたしのもとへよこすとき、渡して持たせるのだ。これでただちにわが子と知れよう」

ゴンサロ・グステイオスはこう言い置いたあと、アルマンソルはじめ居並ぶモロの高官に別れを告げ、サラスへ向けて旅立った。彼が去ってほどなくして、そのモロの女は男子を出産した。そこでアルマンソルは乳母を二人つけて育てるよう命じた。子はムダーラ・ゴンサレスと呼ばれることになった。さて、ここでこちら側の話はいったんおく。物語の先の適当な箇所ですたたび語ることにする。今度はドン・ラミーロ王について触れるとしよう……

第七五一章 ムダーラ・ゴンサレスがルイ・ブラスケスを討ったこと。アルマンソルがコヤンカを占領しキリ

スト教徒の地を荒らしまわったこと。

ドン・ベルムド王の治世の七年目、すなわち一〇〇六年、受肉の年から数えて九六八年目、オットーの帝国の

三七年目、アルマンソルは十歳になったムダーラを騎士に叙任した。まだ年端のゆかぬ子供ながら、知勇ともにすぐれ、行状も万事よいのを見て、とても愛していたのだった。アルマンソルは同じ日、ムダーラの母方の親戚の従士約二百人も同様にした。この者たちをこのムダーラ・ゴンサレスに任せよう、彼をあるじと仰がせ、守らせようとの思惑からであつた。やがてムダーラは武勇抜群の立派なつわものとなつた。アルマンソルを別にすればモロの中で右に出る者はなかつた。すでにムダーラは七人の兄が謀殺されたいきさつ、父親が捕らわれの身となる恥辱を味わつた経緯を聞かされていた。そこであるとき家臣はじめ配下の者を全員集めて言つた。

「聞いてくれ。すでにそなたらも知るとおり、わが父ゴンサロ・グステイオスはなにもしておらずなんのいわれもないのに、不当、理不尽にも塗炭の苦しみを味わうはめになつた。またわが兄たち七公子も畏にはめられ殺された。そこでキリスト教徒の地へ赴き、かたきを討てるものなら討ちたいと思う。皆、どうすればよいと思う？ 考えを聞かせてくれ」

訊かれて一同はこう答えた。

「なんであれ殿がよいと思われることには少しの異存もございません。われらの務めは殿をお守りすること。殿にお仕えし、ご命令を行なうこと」

一同の返事を聞いてムダーラは母親のもとへいった。そして父上を訪ねて無事でおいでかどうか様子を確認めたいと言ひ、ついでには自分を見分ける印に渡された形見をお渡しただけませぬかと頼んだ。そこで母親は、ゴンサロ・グステイオスが託した割つた指輪の片方を渡した。ムダーラ・ゴンサレスはそれを受け取り、母親に別れの挨拶をした。つづいてアルマンソルの前へ参上して父親に会いにいきたいと願ひ出ると、よからう、許すと聞き届けられた。そのあとムダーラは、アルマンソル以下なみいる権臣に別れを告げて旅立つた。史伝によれば騎馬の大軍勢を引き連れていたとか。一行はサラスに着くとゴンサロ・グステイオスの館へ向かつた。彼らに会つたゴンサロ・グステイオスは、何者かと尋ねた。ムダーラ・ゴンサレスは「ドン・ゴンサロと申す者。コルドバで生まれました。そなた様の息子でございます。その証拠に、指輪のこの片方を持ってきております」と答

えた。ゴンサロ・グステイオスはそれを見てぱつと顔を輝かせ、歩み寄って彼を抱擁した。二人は何日か親子水入らずで過ごしたが、やがてムダーラ・ゴンサレスは父親に打ち明けた。

「ドン・ゴンサロ、わたしがこうしてまいったのは父上の恥辱、それに殺されたわが兄たち七公子の復讐を遂げるため。一日も早くそれを果たさねばなりません」

このあと二人は馬に乗り、三百騎を引き連れてガルシ・フェルナンデス伯のもとへ向かった。伯のいる館へはいると、ムダーラ・ゴンサレスは伯の前でルイ・ブラステスとその一派に決闘を挑んだ。するとルイ・ブラステスは、いくら脅しても無駄だ、それに伯の御前で口にしてよいことと悪いことがある、偽りを申すなど言語道断と聞き直った。それを聞いたムダーラは剣に手をかけ、ルイ・ブラステスへ歩み寄って斬りかかろうとした。しかしガルシ・フェルナンデス伯がムダーラを取り押さえてやめさせた。そうして決闘まで三日置くことを命じた。伯にもそれがせいぜいだった。この取り決めのもと双方とも伯のもとを去り、それぞれの本拠へ戻った。ただしルイ・ブラステスは明るいうちにバルバデイリヨへ向かうのを恐れ、夜を待つて出立した。それを知ったムダーラ・ゴンサレスはルイ・ブラステスを通るはずの道の近くに潜んだ。そうしてやってくるどきと姿をあらわし、叫んで言った。

「死ね、悪党！ よくも謀ったな、裏切り者め！」

言葉と同時に太刀風鋭く切りおろすと、ルイ・ブラステスは体が真っ二つに裂け、絶命して地面へ落ちた。ムダーラはこのときさらに同行していた三十騎を討ったと史伝は語る。後年、ムダーラはガルシ・フェルナンデス伯の死の直後、ドニャ・ランブラを捕らえて火あぶりにした。伯の存命中は伯の血縁者であるのを憚って、控えていたのだった。また、この年アルマンソルは大軍を催し、キリスト教徒の地へ来襲して荒らしまわり、さらにコヤンカ、現在バレンシアと呼ばれている城市まで攻め込み、これを囲んだ。この年はまた皇帝オットー一世が没した年でもあった。そのあとはオットー二世が十年にわたって統治した。

* 翻訳にあたっては次の定本を用いた。

Menéndez Pidal, R., “*Los Siete Infantes de Salas*”, en *Reliquias de la épica española*, ed. Diego Catalán, segunda edición, Madrid, Gredos, 1980, págs. 181-’98.

なお作品は『イスパニア全史』（*Estoria de España* の初巻 *Primerra crónica general*）において散文文化されて伝わっているため、翻訳も散文となっている。章の番号や題は『イスパニア全史』において付されているもの。

